

ロンチェンパにおけるヴィマラミトラ像

安 田 章 紀

1. はじめに

ヴィマラミトラ (Vimalamitra, 8 世紀後半から 9 世紀前半に活躍) はインドからチベットに招かれ、前伝期の仏教伝播に少なからぬ功績を残した。ニンマ派 (rNying ma pa) では彼を祖師の 1 人として重視しており、彼によるとされる翻訳文献や著作群の、同派思想史の上で占める位置は大きい。ヴィマラミトラに関してはこれまで、チベットの歴史書に見える彼の事跡¹⁾と彼自身の著作から読み取れる思想²⁾という 2 つの側面から研究が蓄積されて来ているが、本稿では従来とは異なるアプローチ、すなわち、ニンマ派の代表的な学僧として知られるロンチェン・ラブジャムパ (Klong chen Rab 'byams pa, 1308-1363) の各種の著作を取り上げ、その中のヴィマラミトラに関する記述に着目し、ロンチェンパ個人にとってのヴィマラミトラ像が如何なるものであったかを探ることを試みる。

2. 年代記

ロンチェンパの手になるゾクチェンの年代記には、ヴィマラミトラの言行が時系列に沿って記述されている。詳細は先行研究³⁾に譲るが、手短にまとめれば、ヴィマラミトラの出生、インドでの奇跡譚や教化活動、ゾクチェンの伝授を受けたこと、チベットへの招聘、仏典の翻訳事業、ゾクチェンの教授と、ゾクチェン関連文献の埋蔵、最後に中国の五台山へと去ったことが記されている。ここでは、ヴィマラミトラがその事跡を通して、外側から、ゾクチェン史上の偉人の 1 人として描かれている。

3. 礼拝文と請願文

ロンチェンパがヴィマラミトラに捧げた礼拝文と請願文の例は以下のようである。

太初の状態へとそのまま解脱し、慈悲が自ずから成り立った衆生の誉れ、あらゆる持明者の主、ビマ〔ラ〕ミトラ (Bimamitra) に礼拝します。幸福な者を導いて〔輪廻の有情が〕空っぽになるまで、利他の大遷移身〔として〕五台山に常にいらっしゃる、ビマ〔ラ〕ミトラに礼拝します。自ずから成り立った知と憐れみのはたらきによって、衆生の利益を完成させ、無漏で自ずと完成した金剛身であるヴィマラミトラ (Dri med bshes gnyen) に礼拝します⁴⁾。

般若の智慧の宮殿において、ヴィマラミトラにお願いします。自ずと成り立っている自然状態の修習が、追及なしに完成するよう加持して下さい⁵⁾。大ブハスイン尸林において、大学者であるビマ〔ラ〕ミトラにお願いします。現世では哲学の密意である三昧が増幅し、中有では光明に熟練するよう加持して下さい⁶⁾。

以上の例から、ヴィマラミトラがロンチェンパにとって、自ら修行を完成させ自利と利他の双方を兼ね備えた理想的な行者として讃仰の対象であったこと、また、後世の修行者に進歩と熟達をもたらす存在として祝福を願うところの祈願の対象であったことが窺える。いずれにせよ、ここに見られるのは、ヴィマラミトラに対するロンチェンパの直接的な呼びかけであって、ヴィマラミトラがその徳性を通して、内側から、強い存在感をもって捉えられている。

4. 成就法

ロンチェンパの『ビマラ師成就次第』は、同書全体がヴィマラミトラの観想修行に捧げられている。その中から重要な箇所を抜粋して示すと次のようである。

中国の五台山から、眷族である無量のダーキニーの集団に取り巻かれたビマラ〔ミトラ〕師が、鷲鳥の群れが飛んで来るように上空にやってきたのに対して、知で化作した供物で供養し、“dzah hūm bam hoh”と唱えて、〔あらかじめ〕生起させておいたビマラ〔ミトラ〕に融解させる。それによって、顕現し得るものすべてが光としてきらめき、〔それら〕神と女神の本性によって満たされたものが金剛歌を歌い、吉慶頌〔を読み上げ〕、供物の大雨を降らせていると思ひ浮かべる。そして、ビマラ〔ミトラ〕師の身体から、光と甘露の雫が降り注ぐことによって、自分の頭頂のてっぺんから足の裏までが満たされ、身口意の3つの罪がすべて浄化され、無漏の大樂が増大し、灌頂と悉地すべてを得たと思ひ浮かべ、“om āh hūm guru Bimala Badzrasatwa dharmakāya siddhi hūm”と出来る限り〔の回数〕誦する。そして、〔観想の〕セッションを終える間際には、ビマラ〔ミトラ〕師および眷属のすべてと、外と内の器・情世間のすべてが自分に融解するのである⁷⁾。

ここではヴィマラミトラの映像を中心とし、観想者自らの身体や心、その他あらゆる外的な物象をも巻き込んだ壮大な観想上の劇が展開されている。以上の記述からは、ヴィマラミトラがロンチェンパにとって、観想によってはっきりと形

(60)

ロンチェンパにおけるヴィマラミトラ像 (安 田)

象化され、想像的視覚の上に繰り広げられる出来事を通して、生き生きとした具象性を帯びる存在としても把握されていたことが分かる。

5. クマラーザ

最後にロンチェンパが、彼の多数の師匠のうち、最も重要な師であるクマラーザ (Kumarāḍza, 1266–1343) をヴィマラミトラの化身、すなわち、ヴィマラミトラその人の再来と捉えていた事実を指摘する。

以上 [のタントラの記述が]、私たちの最高の師、比丘にして吉祥を備えた者、衆生の庇護者であるクマラーザに至るまでの化身出現の予言の順序次第であるが、とりわけ「100年ごとに、このチベットにビマラ〔ミトラ〕の化身が1人ずつ、この心髄の要所の確定を明らかにする。」と『大年代記』に設定されているその〔人物〕は、この最高の人〔クマラーザ〕である。なぜなら、阿字の形状をもつ痣を舌の先に持ち、教誡の要点の確定が他者よりも優れ、神通によって未来を予言し、難点の確定を明晰に説き、涅槃した時も、希有な徴の確証によって世界を埋め尽くしたからである。この人と出会った者はだれでも、輪廻の村落から努力なしに解脱するので、閻浮提の飾りとして〔彼は〕出現したのである⁸⁾。

そもそも、クマラーザは『ビマ・ニンティク』 (*Bi ma snying thig*) という、ヴィマラミトラに由来するとされるゾクチェンの口伝書群をロンチェンパに伝授した人物である。これに加えて、上記の引用にもある『ゾクチェン・ニンティクの大年代記』の、ヴィマラミトラ再来に関する伝承⁹⁾が混ぜ合わされて、クマラーザこそ100年に1度の希有なヴィマラミトラの出現にほかならないとの信念がロンチェンパの中に形成されたと思われる。以上から、ヴィマラミトラがロンチェンパにとって、肉化・現実化した存在でもあったことが分かる。

6. まとめ

以上の考察から、歴史上の偉人としての、呼びかけの対象としての、観想による生き生きとした具象化の対象としての、さらには、自らの師匠その人としてのヴィマラミトラという風に、ロンチェンパにおける、複合的なヴィマラミトラ像の存在があきらかになった。言い換えれば、ロンチェンパにおいてヴィマラミトラは、年代記中の人物から実際の師に至るまで、それぞれに重要な役割を担いつつ、幅広く多面的な表現を獲得しているとも言えよう。

1) 金子 [1980: 287–289], 同 [1980a], 同 [1982: 50–52, 57–58], Esler [2005: 36–

- 38], Faber [1989], Germano [2002: 241–248] を参照。
 2) 赤羽 [2004], 大八木 [2001], 同 [2002], 同 [2009] を参照。
 3) 金子 [1980: 286–288], 同 [1982: 50–52] を参照。
 4) *Phyag 'tshal yid bzhin nor bu* 32.3–5.
 5) *gSol 'debs bdud rtsi'i chu rgyun* 41.4–5.
 6) *dGongs brgyud* 19.3–4.
 7) *Gu ru bi ma la sgrub pa'i rim pa* 53.2–54.2.
 8) ThChDz 94a7–b3. Cf. *Lo rgyus rin po che'i phreng ba* 123.5–124.4, *Rig 'dzin chen po Ku ma rā dza'i rnam thar lo rgyus dang bcas pa* 483.6–484.1.
 9) *rDzogs pa chen po snying tig gi lo rgyus chen mo* 590.4–5.

〈略号および参考文献〉

NyThYZh: *sNying thig ya bzhi*, 13 vols., Delhi: Sherab Gyaltzen Lama, 1975. ThChDz: *Theg pa'i mchog rin po che'i mdzod*, in Ehrhard [2000], pp. 1–510. BMNyTh: *Bi ma snying thig*, in NyThYZh, vols. 3–6. BMYT: *Bla ma yang tig*, in NyThYZh, vols. 1–2. ZMYT: *Zab mo yang tig*, in NyThYZh, vols. 12–13. *Gu ru bi ma la sgrub pa'i rim pa*, in ZMYT, part 1, 51.5–56.1. *dGongs brgyud*, in ZMYT, part 2, 18.2–23.4. *Phyag 'tshal yid bzhin nor bu*, in ZMYT, part 1, 30.2–39.5. *rDzogs pa chen po snying tig gi lo rgyus chen mo*, in BMNyTh, part 3, 427.1–605.3. *Rig 'dzin chen po Ku ma rā dza'i rnam thar lo rgyus dang bcas pa*, in BMNyTh, part 4, 455.1–498.3. *Lo rgyus rin po che'i phreng ba*, in BMYT, part 1, 84.4–134.6. *gSol 'debs bdud rtsi'i chu rgyun*, in ZMYT, part 1, 39.6–45.3. 赤羽 [2004]: 「Vimalamitra の Rim gyis 'jug pa'i bsgom don — その特徴と問題について —」, 『日本西藏学会々報』 50, pp. 49–65. 大八木 [2001]: 「Vimalamitra 造 Prajñāpāramitā-hṛdaya-ṭikā 和訳研究」, 『豊山教学大会紀要』 29, pp.362–240. 同 [2002]: 「Vimalamitra 造『聖般若波羅蜜多心広疏』に見られる『大日経』」, 『密教文化』 208, pp.90–72. 同 [2009]: 「Vimalamitra 造 Prajñāpāramitā-hṛdaya-ṭikā 和訳研究 (2)」, 『仏教文化学会紀要』 18, pp. 24–36. 金子 [1980]: 「ニンマ派における「心髓」の相承系譜」, 『大正大学研究紀要』 65, pp. 280–314. 同 [1980a]: 「ヴィマラミトラの伝承」, 『宗教と文化: 斉藤明俊教授還暦記念論文集』, 東京: こびあん書房, pp. 421–436. 同 [1982]: 『古タントラ全集解題目録』, 東京: 国書刊行会. Ehrhard [2000]: *The Oldest Block Prints of Klong-chen Rab-'byams-pa's Theg mchog mdzod: Facsimile Edition of Early Tibetan Block Prints with an Introduction*, Lumbini: International Research Institute. Esler [2005]: “The Origins and Early History of rDzogs chen,” *The Tibet Journal* 30–3, pp. 33–62. Faber [1989]: “Vimalamitra—One or Two?,” *Studies in Central and East Asian Religions* 2, pp. 19–26. Germano [2002]: “The Seven Descents and The Early History of Rnying ma Transmissions,” *The Many Canons of Tibetan Buddhism: Proceedings of the 9th Seminar of the International Association for Tibetan Studies* (Leiden 2000), Leiden: Brill, pp. 225–263.

〈キーワード〉 ヴィマラミトラ, ロンチェンパ, ニンマ派

(京都大学非常勤講師)